

認定特定非営利活動法人 日本雲南聯誼協会  
れんぎ

【東京本部】〒162-0846 東京都新宿区市谷左内町 21-13 1階  
Tel:03-5206-5260 Fax:03-5206-5261  
Email:yunnan@jyfa.org URL:<http://www.jyfa.org/>  
【雲南支部】中国雲南省昆明市人民東路 289 号集大広場 2011 室  
Tel.+86-871-63311468 Fax.+86-871-63320658  
<http://www.facebook.com/NPO.JYFA> @jyfa  
ブログ 雲南の郵便屋さん 検索  
編集・発行人 初鹿野 恵蘭  
印刷協力 昭和情報プロセス(株) (株)技術評論社



Japan Yunnan  
Friendship Association

# 彩雲の南

## 第52号特別号

発行日 2015年(平成27年)2月15日

会報

# 第1回日本雲南大学生交流スタディツアーセンターハウス 感動活動報告!

「日本と雲南の学生が1週間寝食共にフィールドワークを実践」



★オリエンテーション後に大集合!いよいよスタディツアーアルバム!

日本雲南大学生交流スタディツアーアルバムは、「アジア未来への人材育成プロジェクト」の一環として、日本雲南聯誼(れんぎ)協会(以下協会)が企画・開催したものです。このスタディツアーアルバムは、2014年から継続事業として日本と中国雲南省で交互に実施し、10年間で500名の両国の大学生に参加して頂く事業です。その目的は、共同作業や異文化体験を通じ、互いの地域に対する見識を高め、相互理解を深めていくこと、豊かな感性と国際感覚、広い視野を持ってアジアの未来のために貢献する人材を育成することです。

今回の2014年度夏は日本大学生12名が中国雲南省を訪問し、日本語を学ぶ現地大学生16名と共同チームを組みました。協会の実施した独自のカリキュラムに則って、「学生だからこそできる社会貢献」を頭文字に具体的な探求テーマを7つ設定し、7つのチームに分かれました。探求テーマに沿ったディスカッションを重ね、現地でフィールドワークを行いました。ディスカッションの経験が少ない雲南の学生を日本の学生がリードするようにはじまりましたが、段々と雲南の学生も探求テーマの問題点や解決策について考え、発言することがで

きるようになってきました。又協会が過去に培ってきた関係各所の協力で「食文化交流」「企業・産業観察」「協会の支援する小学校への訪問及び貧困地域での暮らし」「少数民族の村での農業体験」等を行うことも出来ました。

現地で過ごした7日間の努力は、学生ならではの様々な具体的な社会貢献活動プランとして、最終日の発表会で実りました。

雲南滞在は1週間という短い間でしたが多くの出来事が私たちに降りかかり、立ちふさがり、ぶつかってきました。雲南の大学生とは勿論のこと、日本の大学生同士でも

異文化体験だと思えることがありました。広い視野を持つとはどういうことなのかを感じた日々の連続でした。泣いたり、怒ったり、笑ったり、感情を揺さぶられて過ごした雲南滞在は間違いない、雲南の大学生だけでなく、日本の大学生の成長にもなりました。今ハッキリといえることはスタディツアーアルバムに参加した大学生同士はこれからも仲間であるということです。これから社会の働き手となる私たちが仲間になれたことは日雲友好の第一歩であり、私たちの友人、友人の友人と少しずつ友好の輪が広げることができると確信しております。



★オリエンテーションもプラン作りのため皆真剣。

### 第一回スタディツアーアルバム

8月29日(金) 成田空港から北京経由で昆明へ

30日(土) ★雲南師範大学にてオリエンテーション

雲南の学生と初の対面。アイスブレイクや民族ダンス等で交流後グループ毎に雲南でのフィールドワークの実行計画を考える。  
夕食は全員でキノコ鍋を囲み懇親会!

31日(日) ★食文化交流

市場へ雲南の学生に助けてもらしながら食材購入。  
日本と雲南それぞれの料理を作り交流試食会。

★午後は昆明市内でそれぞれフィールドワーク実施。

9月 1日(月) ★雲南省最大の産業市場観察。

★お茶市場で専門家によるプーアル茶のレクチャーを受ける。  
★雲南民族村を訪問。その他各自フィールドワークを実施。  
★雲南省招商合作局のご招待による会食。

2日(火) ★いよいよ少数民族の村へ。

協会支援小学校、老木壩小学校・老村村小学校に宿泊。

3日(水) ★農業や災害復旧など様々なボランティアワークを行なう。

それぞれのチーム毎にインタビューなどフィールドワークを実施。また模擬授業や小学生へのカレー作りなど各小学校でチャレンジ!

4日(木) ★仲良くなった小学生と一緒にダンスやゲーム

など教え、昆明へ移動。午後からいよいよ明日に迫る審査会に向けプラン作りにラストスパート!

5日(木) ★1日かけて社会貢献プラン発表審査会!

審査会後はお別れ懇親会。

6日(金) ★日本へ無事帰国。



★成田空港からいざ出発!



### 理事長挨拶 初鹿野 恵蘭 若者と一緒に社会貢献を考えよう。

このたび当協会は「アジア未来への人材育成プロジェクト」の一環として初めて、公募で集まった日本の大学生たちを雲南へ派遣し、日雲の大学生が共同チームで社会貢献について考える「第一回日本雲南大学生交流スタディツアーアルバム」事業を実施いたしました。

今までにない取り組みでしたが、日雲双方の学生たちが必死に考え、意見の不一致や困難にぶつかりながらも、最終的にチームで団結して社会貢献プランをまとめていく姿は、眞の交流支援を実現する誇りある一歩を感じました。学生たちの生き生きとした活動の様子をこの特別号で少しでも感じて頂けたらと思います。

[第一回日本雲南大学生交流スタディツアーアルバム] (順不同、敬称略)

日本側参加者: 前島有加里 お茶の水女子大学、山下真知 清泉女子大学、田村統久 東京大学  
竹内拓海 法政大学、森泉美範 清泉女子大学、大富まりあ 早稲田大学、瀬崎晶 専修大学  
木下千尋 専修大学、宮崎晃平 筑波大学、渡部優美 埼玉県立大学、酒井由太 専修大学  
高山大司 大東文化大学

雲南省側参加者: 張哲 雲南大学滇池学院、劉依萌 雲南大学滇池学院、白雲環 雲南大学滇池学院  
王娜 雲南民族大学、甘黎 雲南民族大学、文家豪 雲南民族大学、包西 雲南民族大学  
金丹 雲南師範大学、周婧怡 雲南師範大学、下豪 雲南師範大学、謝曉鈞 雲南大学  
朱京 雲南大学、劉寬艷 雲南大学、李建美 雲南師範大学、楊曼玲 雲南開放大学  
楊紅雲 雲南財經大学、劉慧娟 雲南民族大学、莽德芬 雲南師範大学

助成団体: 公益財団法人 三菱UFJ国際財団、公益財団法人かめのり財団

協力: 雲南大学、雲南師範大学、雲南滇池学院、雲南民族大学、日中友好尋甸県老村僑心小学校  
日中友好尋甸県老村僑心小学校、老木壩小学校、雲南省招商合作局、(株)技術評論社、

# チームプラン発表!

学生ならではの社会貢献プラン。  
実現に向けて真剣に考え方を探しました。

## 食と健康チーム

渡部 優美(サブリーダー)、大富 まりあ  
謝 曜翎、王 金丹、王 娜

食と健康チームは、  
中国で有名なお茶と  
昆虫食にテーマを絞り  
フィールドワークを行  
いました。

10種類以上のお茶を飲み比べて、お茶屋や  
漢方屋を巡り、中国人がどのように健康を気  
にしているかを学び、昆虫食を食べてみたり  
、中国でしかできないようなことを行いました。  
フィールドワークの結果、わたしたちは  
お茶や昆虫食で、足りない栄養素を補えるの  
ではないかという提案に辿りつきました。お  
茶の苦みを減らす花茶とのブレンドのレシピ  
と、昆虫の見た目が気にならずに食べれるレ  
シピの開発をして、お茶の習慣や昆虫食が広  
まる事で栄養の過多や不足を解決できるの  
は無いかと考えました。



## 労働チーム

前島 有加里(リーダー)、森泉 美範、  
文家豪、白 雯璐、楊 曼玲

雲南の就労状況、  
就労前の人々の就労  
に関する意識、雲南  
の企業、沢山の資料  
を調べました。就職  
について去年大学卒業生は699万人。去年よ  
り19万人増えました。そのなかで雲南の卒業  
生は14万人で、去年より1万人増えました。  
雲南の普通世帯の給料は2000元で3000元が  
みんなの理想です。技能士の仕事は経験と専  
攻を重視します。販売の仕事は、社会経験と  
個人の素質を重視します。学歴はあまり重要  
ではないです。雲南の労働者の素質は、全国的  
にみると低く、技術のある人は30%程度です。  
中小企業や遠い地方には就職者への需要  
があるが、技術のある人たちはより良い就職  
先を求めて、そういうところに入社しようと  
せず、結果として就職率が減っていました。



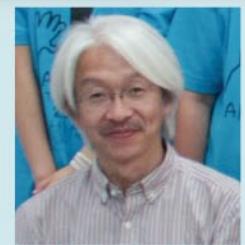
## 審査員



★雲南師範大学日本語科  
主任 張彦萍先生



★雲南大学外国语学院日本  
語学科学部長 饒瓊珍先生



★雲南民族大学日本語学科  
日本語教師 後藤裕人先生



★昆明理工大学生命科学  
技术学院应用微生物研究室  
柳陳堅農學博士



★日本雲南聯誼協会スタディ  
ツアーグループ長・林則幸

## 芸術チーム

田村 統久、瀬崎 晶  
甘黎(サブリーダー)、劉 依萌、包 薇



私たち芸術チームは、都市部にある自然学  
校と、地方にある老木壠小学校の生徒たちと  
一緒に日本の伝統的な遊びであるカルタを作  
りました。無地のカルタに、生徒たちが触れる  
ことが少ないポスター色で色を付ける  
ことによって、遊びを通して芸術を伝える  
ことができ、野菜や、動物を絵のテーマとして  
起用することで、それらの知識の吸収を促す  
こともできました。言葉が通じなくても芸術  
は一緒に楽しめるのだと感じました。



## 衛生チーム

木下 千尋、竹内 拓海、  
劉 寛艶、楊 紅云



衛生環境についてフィールドワークやワー  
クショップを行い、それに基づいた社会貢献  
プランを考えました。村の衛生は私たち日本  
の学生はもちろん、雲南の学生も悪いと思っ  
ていたが現地の人が良いと思っていることを  
改良する必要のないことにチームメンバー全  
員が気づいた。3日間小学生たちと共に過ご  
し、遊んでいたわけだが、その中で子供た  
ちに虫歯が多いことに気付いた。そこで私た  
ちは漠然とした社会貢献ではなく、子供たち  
の口の中の衛生というところに目をつけ、虫  
歯についての社会貢献プランを提案しました。



## エネルギーチーム

高山 大司  
張 哲(サブリーダー)



農村地域の生活改善の視点として「家庭内  
エネルギー」をテーマとしました。具体的な  
方法としては、家庭内使用エネルギーに関する  
アンケート調査を、昆明市内都市部と老村周  
辺にて、直接尋ねる形で行いました。直接話  
を聞いたことで、事前に予想してなかったエ  
ネルギー使用に関わる要素、政府による森林  
保護政策の影響やそれに関連した財政支援の  
村間格差について知りました。強い日差しと  
陽気な人々が印象的でした。



## 教育チーム

酒井 由太、山下 真知、  
周 婧怡(リーダー)、卞 子豪、李 建美、

私たち教育チ  
ームは、図書館の開  
放時間が1時間に  
限られているとい  
う問題では「昼休  
みや放課後を利用  
した開放時間の拡大」、時間割外の授業がな  
いという問題では「フィールドワークの授業  
(自然観察・農業) や、寝る前の読み聞かせ  
の授業」という先生と生徒が交流を深めること  
ができるアクションプランを考えた。プラン  
の課題点には先生への負担がかからてしま  
うことには「委員会のような生徒が管理する  
システムを作ること」、このプランで1番大  
切な先生側のインセンティブを高めさせるため  
には「ボランティアの学生などが教師に向  
けて子供に学習の興味をわかせることがどれ  
ほど大事か説明会を行う」などの対応策を挙げた



## 民族文化チーム

宮崎 晃平、  
朱 倭(サブリーダー)、刘 慧娟、莽 德芬



民族文化チームが提案したプランは休暇中  
に大学生がそれぞれ民俗文化、知っている伝  
統文化を小学校に赴いて伝えることです。問  
題点は三つあります。お金、持続性、公益性  
です。お金なら交通費しかからないからア  
ルバイトでまかなえます。持続性はクラブを  
つくることです。大学性が運営し、社会人ま  
でも参加することができます。公益性ならま  
ず私たちがいる呈貢から、五年後中国34省  
や日本の47都道府県で、十年後は全世界で  
設立したいです。



## 審査のポイントは?!

このスタディツアーの主旨として「学生なら  
ではの社会貢献」を考えることですが、ズ  
バリ実現可能性から実際に実現してしまおう  
というコンセプトで実施しています。参加したみ  
なさんは、事前学習により十分に理解していた  
おかげで審査会前日は仕上げのために徹夜組が  
続出! 各チームは寸前まで真剣に討議したこと  
で、審査もかなり難航しました。その審査基準  
をご紹介します。貢献プランの内容に対して  
は、独創性、実現性、公益性、持続性の4点  
及びチーム力として主体性と共働性について審  
査、合わせて総得点の高いチーム上位2チーム  
に優秀賞を授与するシステムとなっています。  
その狭き門のせいかそれぞれ発表後の質疑応答  
では、審査員以外に学生からも鋭い質問が繰り  
出されとても熱い審査会となりました。

# 社会貢献プラン審査会優秀賞はこの2チームへ！

## 民族チーム 宮崎 晃平

### テーマ～民族伝統文化の継承



私にとって一番印象深いエピソードは、老村・新村でのインタビュー調査である。村を訪れる前日、知りたいことをリストにまとめ、インタビューする質問を考えていた。必ず聞くと決めた質問は「民族・伝統文化を継承することは大切だと思いますか？」である。というのも民族文化・伝統文化を受け継ぐことの大切さを理解しているかどうかを知りたかったからだ。一軒一軒、インタビューを受けてくれた村民に「民族・伝統文化を継承することは大切だと思いますか？」と尋ねた。返って来た回答はすべて「民族・伝統文化が何かわからない。継承とか大切とか普段考えないからわからない」であった。豊かな教育環境で学び、インターネットという多くの人と繋がることが可能な世界で生きてきた私にとって質問することの難しさ、答えを得ることの大変さを実感したのは初めてであった。うまくいかなかつたのは、聞きたいこと知りたいことを先に考えてしまったからだろう。私たちは民族文化・伝統文化に興味を持ち、さらには多くの国を訪れた経験から「文化と

は何か？」「伝承とは何か？」「大切なことは何か？」といったことを考える。中国の学生から後で聞いた話だが、彼ら村民は朝起きて、料理を作り、畠仕事に出かけ、家事を済ませ、家畜の世話をし、日が落ちたら寝るというサイクルを繰り返すことで考えることをあまりしないそうだ。それが毎日全員行っていることでもないし、良いか悪いかという話は別であるけれど、私にとって異なる環境で生きる人へのインタビューの難しさを学んだ印象的なエピソードであった。



★ボランティアワークとフィールドワークを通して沢山の村人と話をしました。

## 衛生チーム 竹内 拓海

### テーマ～歯磨き習慣による虫歯予防



私は、この活動を通して中国理解が深まつたことによって、中国が好きになった。特に、私たちの仲間や調査に協力してくれた人々はみな温かく、印象に残っている。とりわけ彼らの歓迎力には感激したし、同時に私も彼らと同じくらい歓迎したいと思った。私にとっての社会貢献は、「みんながステップアップすること」である。来期は、中国人が真にアジアの未来の人材になるために、スタディツアーワークだけでなく、より継続して学習していくことが大切だと思う。それは、きっとみんながステップアップしていくことに繋がっていくだろう。最後に、協会の方々をはじめとして、一緒にプロジェクトに取り組んだ仲間たち、お世話になった中国の方々に感謝の意をこめて、私がこれからも社会貢献を続けていくことを、想起したい。私は、感謝の気持ちを忘れずに、これからもより中国との友誼を深め、社会や友人に貢献できる人間となりたい。



★老村小学校では歯磨き授業にトライしました！



★芋掘りに悪戦苦闘!どこだ~??



★すぐに子供たちと大の仲良し



★フィールドワークはいつも子供たちと一緒に



★ごめんなさい!あまりの臭いに入ることが出来ませんでした。

## 審査委員の先生からのメッセージ



### スタディツアーオの意義

### 異文化を体験し、友好を深める！

雲南師範大学外国語学院 張彦萍準教授

日本雲南聯誼協会主催の第一回日本雲南大学生交流スタディツアーウークショップ協力活動は初日と最終日に雲南師範大学で交流活動、発表会を行いました。そのほかの日、雲南省各地現場を訪れ、体験学習を通じて現地事情や相互理解および社会貢献を図ることを目的としてやってきました。情報としてしか持っていないかった教育や環境などの問題を各チームの発表から実感・体験できたという印象でした。いずれのチームも自分なりの視点、考え方からプレゼンをして、すばらしかったです。

一週間寝食を共にして、異なる文化・考え方を持つカウンターパートと一緒に過ごすこ

とによって得るものがあると固く信じております。それらを持って、お互いに友好を深めることができると望んでおります。それはスタディツアーオの意義だと考えております。このツアーオを通じて参加者の今後の発想・考え方、大きく言えばその生き方のヒントも得られることになると信じます。

最後にこのスタディツアーウークショップに参加した皆様にお願いしたいのはツアーオで得たものや経験した事をたくさん的人に伝えていくことです。今後もこの体験をいい思い出に終わらせるだけでなく、興味があったことを更に調べ、様々な方面へと活用できるよう願っております。



### 第一回日本雲南大学生交流

### スタディツアーオから感じたこと

雲南民族大学外国語学院日本語教師 後藤裕人

中国の大学で日本語を教える私としては、日本からどのような学生が参加してくるのか、そして彼らはどのようなことを考えているのか非常に興味がありました。おそらく社会に対する問題意識を持った学生が多いだろうと予想していましたが、やはり、初日に行ったグループプランの作成では日本的学生が中心となりグループをリードしていく姿が多く見受けられました。

一方、中国の大学生はというと、言葉の問題もあったでしょうが、やはりグループワークという取り組み手法と、自分で課題を設定していくというアプローチに戸惑いを感じているようでした。



しかし、最終日の各グループの発表、その後のTシャツに互いにメッセージを書きあう姿を見て、この活動の意義を再認識しました。異なる文化背景を持つ若者同士が1週間、真剣に一つのことに取り組んだという体験は、彼らの今後に、必ずプラスになるだろうと思っています。



## 市場で食材入手から始まった食文化交流!

8月31日

オリエンテーション終えた3日目、早朝から全員で市場へ行きました。その目的は、お昼の食文化交流で作る食材の入手です。雲南の学生と日本の学生が別れ、日本食と雲南料理を作り食べてみようという事です。市場に着くと担当料理別に別れて野菜を中心とした食材を大量に購入しました。市場では生きた鶏と解体された鶏が目前に広がる風景に发展途上国の経験の無い日本の学生の多くはびっくり。命食べるということを実感しながらもおつかなびっくりの買い物になりました。料理会場に入り、作業を始

めるともうんやわんや。それもそのはず日本と雲南の学生にスタッフも入れると30名を超える大所帯。道具の貸し借りや、料理を作るところを見て、「これは何作ってるの?」「おいしそう、つまみ食いしてもいい?」「私もそれ作ってみたい!」などなどキッチン交流が活発に行われました。普段は料理しない学生も頑張り、大量に出来上がった日本と雲南の料理それぞれの国のかみを体感し、もうお腹いっぱいで何も食べれないというまでみんなのお腹を満たしてくれました。



# 参加大学生代表メッセージ

雲南省グループリーダー 周婧怡

皆さん、こんにちは。私は雲南師範大学三年の周婧怡と申します。中国側のリーダーを担当しました。今回、このスタディツアーに参加して、皆さんと出会えて本当に幸せです。昆明にいたこの一週間は皆さんから色々なことを教えていただき、私は日本のことあまりわからない状況から今の日本のことわかるようになれたのは、優しい皆さんのおかげです。

たったの一週間といつても、皆さんと親友になりました。このご縁をぜひ大切にしましょう！私たちと一緒に過ごした楽しい時間を、私はずっと忘れません。

この一週間、本当にありがとうございました。スタディツアーを通じて、多くの日本文化や日本式のやり方を学ぶことができました。これらは、今後の日本語の勉強のしっかりととした基礎となります。これからも頑張っていきたいと思っています。

最後になりましたが、今回私たちにこのような機会と、大変素晴らしいイベントを与えてくださった日本雲南聯誼協会には大変感謝しております。



★AKB48を子どもたちと踊ってみました。



★小学校の教室で宿泊しました。

日本グループリーダー 前島 有加里

このツアーは、様々な思いを持った学生が、興味のあるテーマを雲南の発展と関連付けて調査する所から始まりました。

しかし全てが曖昧で、初めは何をどう調べれば良いかすら分かりませんでした。

そんな状態の中、いよいよツアーは始まります。始まってみると、本当にめまぐるしい9日間で、想像と現実の乖離への驚きやメンバーとの衝突はあれど、立ち止まる暇などなく、ただ必死に走り続ける日々でした。しかし、このストレスが私たちに本当に多くの学びを与えてくれました。協会の方が、敢えて余計な情報は口にせず見守ってくれたからこそ恵みです。

さて、必死な活動の成果として、感じた思いを現実問題に落とし込むという複雑で難しい作業を乗り越え、課題解決策を発表しました。今後は、より多くの人に雲南を知つてもらうと同時に、この提案を実現させるのが私たちの使命だと思います。第1回参加者として、今後10年に渡るツアーの強固な土台として尽力したいです。



★なぜか災害復旧ボランティアに。

夢基金代表 劉 寛艶

私の心に深く刻み込まれていることは、私の迷いとちひろちゃんの決断力の違いです。私は何をするのでも迷ってしまうことがあります。考えすぎかもしれない。ちひろちゃんは私に「なんでやらないの」と聞いて、すぐやります。今回のスタディツアーでの変化と進歩は、多分決断力という良い習慣を身につけられたことです。また社会貢献とは、社会をより良くする活動だと理解することができました。人と人、人と自然環境、人と自分それぞれの関係をうまく処理して、豊かな平和な社会を建てられるようにします。これは確かに長い道のりです。

いい出会いから、悲しい離れまで、短い一週間でしたが皆の友情は固くなりました。あつという間に終わったこの一週間は私にとっては忘れられない、いい思い出です。この機会を提供してくれた皆様に感謝致します。日本の大学生と一緒に社会貢献プランを作つて、すごく勉強になりました。

最後の最後に、みなさんに一言を言いたいです。「お疲れ様でした、ありがとうございました」。



★雲南の大地と自然に感謝!!

## コラム～雲南で感じたこと、思ったこと

山下 真知(教育チーム)

中国の雲南省、老木壩村にある小学校を訪れ、小学生と一緒にAKB48の「恋するフォーチュンクッキー」を踊った時に、スタディツアーが始まって初めての涙がでた。初日に開かれたオリエンテーションで、一緒にダンスをした。ほとんど村や小学校の状況を把握しないまま、村に向かった私たたが、その時知っていたことは、小学生は親元を離れ、寄宿しながら勉強しているということだった。小学生の中には、自分たちが話す言語とは異なる言語を発する私たち日本人を見たからか、または、急に大きな体の人が小学校に来て走り回りだしたからか、泣き出す人もいた。雲南省の昆明から車で4時間ほど離れたところに位置する老木壩村では、あまり村の人以外と接する機会が少ないので、自分達と異なる文化を持つ私たちを初めて見たときは、大きな衝撃を受けたに違いない。山の中、沢山の木々に囲まれた小学校の校庭に「恋するフォーチュンクッキー」が流れた瞬間、小学生たちの心情はどうであったのだろうか。初めて聴く曲と共に異国の人を中心になって踊りだす姿は、小学生たちの目にどう映ったのだろうか。私たちは、小さな校庭いっぱいに広がる小学生の輪に入り一緒に踊った。彼らは、みんなとても素直だった。数時間前まで泣いていた子供も、泣き止み一緒に輪になって踊っていた。私の隣にいた少女は、踊らずに、ただ立っていた。私はこの少女を見た瞬間に涙が止まらなくなってしまった。

私は一緒に踊ろうと、少女の手を握って踊る真似をしてみせたが、曲の終盤になんでも踊らずに、ただ周りをキョロキョロと怪しげな目で見ていた。彼女は何を考えているのか私はいつも考えた。その時、私の頭の中には、まだ私の年齢の半分にも満たない小学生たちが、親元を離れながら生活しているという事実が流れた。



いきなり小学校を訪れた私たちが音楽をかけ、踊らせようとしている行動は、まだ世間を理解していない小学生を混乱させているのではないか。元気に踊っている小学生も沢山いたが、低学年では、私の隣に立ちすくんだ少女以外にも踊らずに様子を伺う人も数人見かけられた。私の年齢の半分にも満たないのに、寄宿しながら勉強をするといった生活形態は、私の幼い時には考えられず、彼らを心から尊敬した。彼らが学校へ通うとなると、距離があるため、どうしても親と過ごす時間を犠牲にしなくてはいけない環境が老木壩村では当たり前であった。



この事実は、いかに私が日本で大学生になつても両親と住みながら学校へ通うことができるが幸運なのか実感した。また、小学生は人に甘えることが好きだ。教師と交流する姿は、私の目ではあまり見ることはなかった。彼らは大人に甘えることを知っているのだろうか。強い信頼関係を築いているのだろうか。泣きたいときには、誰に泣きつくのだろうか。こういった疑問が沢山私の頭の中に浮かんだ。そんなことを考えていた私の隣では、いつのまにか先ほどまで立ちすくんでいた少女は、私が動かす手に合わせて、仲間の動きに合わせて、険しい顔をしながらも踊り始めたのだ。これは、今自分がやるべきことを理解したからなのか、心を開いたからなのか、あるいは、急に踊りたくなったからなのか、分からないが、彼女が踊る姿は、私に感動をもたらした。親と一緒に暮らしておらず、まだ世間を知らないとはいえ、小学生たちは過酷な状況を受け入れ、仲間と共に生活している姿は逞しく見えた。これが私がスタディツアーを通して一番印象に残った事である。



★招商合作局から夕食のご招待を受けました。杜勇局長、ありがとうございました。



★芋掘りボランティアのお礼に朝食をごちそうになりました。地元の食材を使った新鮮な食事にもうお腹いっぱい!



★お世話になったそれぞれの小学校で大鍋カレーを作り子供たち食べもらいました。80人前のこの分量に調理に四苦八苦。



★審査会での発表待ちの間、最後までやりきった充実感に笑いが絶えませんでした。



★村では馬車が大活躍。私たちも便乗させていただきました。

## 編集後記

まだまだ詰めが甘く、突っ込みどころも多いこのスタディツアーの社会貢献プランは言わば宝石の原石で、これから磨かなければなりません。協会をご支援くださる皆様がベテラン研磨職人だとすれば、参加した学生たちはまだまだひょっこり職人。年明けの3月に急遽行うこととなったスタディツアーから早速実行に移していくプランもありますから、ぜひ「アジア未来への人材育成プロジェクト」の名の如く、ひょっこり職人が職人になれるように、キラキラ輝く宝石を作り出せるようにご支援とご協力をお願いします。Y.W